

財団法人 舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C.

NO. 8

目 次

中国民族舞踊と稲作文化（1）

序言	黛民族舞踊文化財団理事長 犬丸 直	2
本文	雲南省舞蹈家協会常務副主席 劉 金吾	3
自然人アイヌ こころの歌と踊り	阿寒湖ユーカラ 座座長 四宅 豊次郎	9
1999年6月のアジア民族舞踊交流会日程		11
1999年7月の『'99昆明世界園芸博覧会』訪中日程		

中国民族舞踊と稲作文化



序 言

黛民族舞踊文化財団理事長
犬丸 直

劉金吾先生の著作にかゝる「民族舞踊と稲作文化」が完成し、上梓のはこびとなりましたことは、誠に慶賀にたえないところであります。

この書は、はじめ黛民族舞踊文化財団の創始者である黛節子前理事長による日本の民族舞踊と稲作文化に関する記述と併せて出版される予定でありました。しかるに残念なことに節子先生は一九九五年十月に永眠されてしまいましたので、このたび劉先生の中国におけることがらについての御労作だけが、先ず公にされることとなったのであります。節子先生は御生前にすでに、日本におけるこの主題についての資料を種々集めておられました。後日誰か人を得てこれらの資料に基づく日本側の記述と比較研究がなされるならば、両国民にとって一層興味ある、意義深い成果となるであります。

日本文化の最も古い様相について、考古学者は、発掘された土器の文様により、“縄文文化”と“弥生文化”とに分ち、前者をおゝむね狩猟採取経済に基づく文化とし、後者を後に発達した農耕経済に基づく文化としています。そしてその、西暦紀元前三〇〇年頃に始まるとされる弥生時代の農耕文化は、稲作文化が中心であり、それは明らかに中国大陆から、朝鮮半島を通じあるいは直接に、日本へ伝えられたものです。西紀後六、七世紀の日本の有史時代の始まりから、稲作文化は国民のいとなみの中核的な位置を占めてきたことが、記録に留められています。現代においても、天皇陛下が宮中の田に播種され、手ずから田植えをされ、秋には稲穂を刈り取って祖先の霊に捧げるという儀式が、稲作農耕を国家の基としてきたことの象徴として、行なわれています。

日本の各地方の祭祀、民俗、芸能その他各種の生活文化が稲作農業に強く影響されていることは申すまでもありません。遠い昔にわが国に稲作文化を伝えた中国の稲作文化の源流の地である雲南において、稲作文化はどのような様相を呈し、どのように発達し展開して来たのでありましょうか。このことを論述される劉金吾先生の御著書に、すべての日本国民は多大な興味と関心をいだき、多くのことを学ぶであります。

近代化、国際化の波の中で、西欧的なものにばかり注目し心をうばわれがちな現代において、日中両国の人たちが手をたずさえて、われわれの共通のルーツである東洋の稲作文化に強い関心を持ち、その深い醍醐味を味わうことは、誠に有意義なことと信じます。

中国民族舞踊と稲作文化

謹んでこの本を民族舞踊の事業に生涯力を尽くし、中日両国の民族舞踊芸術の交流に多大な貢献をした日本の民族舞踊家黛節子先生に捧げます。



序 文

雲南省舞蹈家協会常務副主席
劉 金吾

“民は食を以て天と為す”これは中国の古い言い伝えであり、同時に人類の生存にとっての基本的な要素であり、また本能的な要求であります。私たちの祖先は先ず食糧を探し集め、また狩りや漁をし、それから稲作農耕をして食を得るまでに長い歴史の年月を経てきました。中国五千年の文明史の中で農耕文化はその輝かしい一ページを飾ってきたと同時に、生産力が一定の水準に達したしるしでもありました。農業生産の発展を促進する為に彼等は関連する天文、地理、気象、水利、耕作等の技術を身につけ、また祭祀儀礼等の豊富な経験を蓄積してきました。これらの貴重な経験は中国の各民族が共同で創造し、また中国のそれぞれの民族の共同の財産となりました。しかしながらこれらの貴重な経験は漢文化と文字を有するいくつかの民族の間で記載されたものの他にはほとんど文字として記録されることはありませんでした。ところが雲南省の多くの民族の舞踊の中にそれらは整った形で保存されています。人々が自分で楽しむ舞踊にしろ宗教祭祀のための舞踊にしろまたは民俗的なお祭りの舞踊であってもそれには多かれ少なかれ稲作に関連した内容が反映されています。これらの舞踊を通じて私たちは今日の稲作のみならず過去の稲作についても、また過去から現在に至る稲作の長い辛苦の道筋をも知ることができます。無知から英知へ、低級から高級へ、簡単から複雑へ、粗雑な農耕から精緻な農法へ……山地、盆地、水辺というような自然条件、豆、そば、とうもろこし、稲を育てるときのそれぞれに異なった栽培法、刀、シャベル、木ぐわ、木すき、鉄すき等の工具の発明、刀耕、鋤耕から牛耕への進化、さらには木の棒、刀、シャベル、豚の鼻を使つての地面の穴掘り（その中に種を埋める）から種蒔き、田植え、草取り、収穫などへの耕作技術の向上が異なった民族の舞踊の中に同じように表現されています。稲作農耕と自然との関係は密接であり、気候、温度、日照、風雨、季節等は農業の発展に直接影響し、ことに豊作か凶作かについてはこの自然との関係に大いに依存するものです。昔の人々は自然を完全には理解できず、自然の状況に支配される中でただ神霊の加護や祖先の助けを祈るだけであり、それゆえに人々は天を、祖先を、龍神を、土着神を、本主を祭って良い天候を、また五穀の豊作を祈ったのです。稲穂に稲の実がたくさん

つくようと昔の人々は稲魂を送り、稲魂を招き、稲魂を迎え入れました。人々は数ある祭祀活動の一つである舞踊を神を楽しませ、神に媚び、また神と通じることを使い、そのため舞踊は祭祀活動の中で欠くことのできないものとなりました。しかし社会が発展し、人類が自然の力を克服していく中で人々の自然現象に対する理解も進み、祭祀活動もしだいにその“祈り”という内容が薄められて人々が耕作する過程での楽しみや感情の発露が中心になるように変化してきました。そして祭祀活動はしだいに民俗的なお祭りに、神を楽しませることは人を楽しませることに、あるいはその両方の意味を持つようになり、労働と休息とを調整するような実際的な行為として機能するようになりました。これはまた春の農耕が忙しくなる前の時期になぜ祭祀やお祭りが多くなるのかという原因でもあります。春耕の前に人々は神霊や祖先に順調な天候、人畜の安全を祈り、お祭りの喜びを通じて春耕の生産に投入する健康な体力、体に漲る精神力、壮快な気分を有していることを確認するのです。秋の収穫後には人々が豊作の喜びを神に感謝し、一年の労働の緊張をほぐすためまた祭祀や祭りが催されます。

以上のすべての事柄は旧時代の人々が長期にわたって生存のための闘争を行ってきた過程で、また主要な生存のための条件である“食”の問題を解決する過程で、物質的な条件のみならず耕作技術の発展の中で積み重ねてきた一連の豊富な経験、同時に精神的な要素の作用を非常に重視し、精神生活を調節して積み重ねてきた一連の豊富な経験を反映したものです。この事はまた稲作が一種の文化現象となる主な要因でもあります。そして稲作文化について言えば稲作自身に反映されているものを除いてのその他の面でも非常に広範なものであり、民族服飾、民族建築、生殖観念、葬礼儀式等稲作文化の時期に存在するすべてのものが十分に反映され、それらの文化現象が民族舞踊に反映されています。

農耕生産の発展が稲作の時期（段階）に進むと、人々は食糧を得る耕作技術の他にワタや麻を育てる技術も体得し、草衣や樹皮衣、獸衣を身にまとう段階から抜け出して綿や麻の衣類を着る水準にまで到達していました。そして服飾も体を隠したり防寒等の目的から美的センスの視点に移り、各民族は様々な服飾芸術を生み出していきました。これらのことは民族舞踊のスタイルの形成にも影響を与え、それが民族舞踊の美的構成要素ともなりました。服飾文化が反映する自然の特長、社会の特長、文化心理はすなわち民族舞踊のスタイルの成因であります。しかもこの稲作の時期にのみ民族的な“競演祭”、“花衣舞”、“赶花街”のような舞踊が生まれることができたのです。またある民族にある成人式の前後でスカートや衣服、



劉金吾氏著『中国民族舞蹈と
稲作文化』表紙

帽子を換える習俗も稲作が発達した時期の文化の中から出てきました。

農耕生産が稲作の段階に発展するには固定された耕地や水利設備の修繕、あるいは継続的に土地の肥沃度を高めなければならないというようなことが必要とされ、もはや自然に任せた耕作は不可能であり、樹上の家や洞窟の家ではなく平地の家に定住しなければなり

ません。昔の人々が家を建てることを学ぶのは容易なことではなく、どのくらいの長期間苦心をしてきたのかわかりません。漢文化には有東氏^{註2}が家を発明したという伝説が記載されていますが、雲南の民族舞踊の中にも小鳥が巣をつくるのを見て、昔の人々がそれをヒントに家のつくり方を学習していく様子が失敗を乗り越えて成功にいたる道筋として舞踊に仕立てられて残っています。稲作文化の時期には生産の発展の必要性から樹上の家や洞窟の家を出て平地の家に住むことが歴史発展の中での飛躍でした。多くの民族の家の新築を祝う舞は後の世に建築の知識を残すものであるとともに、また知識を得る辛苦を語り、昔の人々が樹上や洞窟の家に別れを告げるときの狂騒、邪悪なもの^{註2}の除霊に伴う動揺、家内安全への賛歌そのものでもありました。

先史時代の人々は人類の生殖、繁栄と自然のそれとは同一のものと思っていました。人類自身、自然や敵に勝つためには子供をたくさん産むことが必要であり、人間それ自体が原始耕作の主力でした。“多くの子孫、多くの富貴、大きな田地に大きな家屋”は稲作の時代の人々が求め続けたものでした。雲南少数民族舞踊の中には先史時代の人々が人類の生殖の秘密をいかにして尋ねたか、また彼等の生育観や生殖崇拜が反映され、多くの官能的な舞踊の実質は先史時代の人々の生存への賛歌でした。特筆すべき先史時代の人々の生殖観念は私たちが探究していた雲南少数民族に大量に伝えられている太鼓舞や芦笙舞の中に存在し、稲作文化の時期に昔の人々がいかにして人の生殖繁栄を穀物の生殖繁栄に溶け合わせたかが太鼓舞や芦笙舞の中にかたちを変えて再現されています。これが太鼓舞や芦笙舞の生命力の源として私たちが理解しているものです。

雲南の各少数民族に葬礼儀式が特に重視されるのは稲作時期におけるその内容の特殊性にあります。今日の稲作知識の獲得が、現在に至るまで人々が食べてこられたことが、すべて祖先の艱難辛苦を経ているものだということを人々は忘れていません。翌年の気候が順調で五穀が豊穡であるように人々は先祖の庇護を求めます。人や家畜の安全のため更に多くの労苦を生産に投入し人々は災いから逃れ、平安を保てるように先祖の助けを祈ります。そのた



芦笙舞（文山州・ミャオ族）

め老人が亡くなったとき、人々は荘重な儀式をとり行い、その老人の恩徳に感謝し、その靈魂を安置し、老人の加護を祈ります。“魂が故郷に帰る”ということが多くの民族の葬礼舞踊にあまねく見られる内容です。それと同時に先祖の観念の中に“今日の死はすなわち明日の生”というものがあり、これこそが“人の生殖は物の（とりわけ穀物の）生殖である”という観念に他なりません。このため老人の死は喜ばしいこととされ、荘重な葬送儀式が行われ、葬礼舞踊が舞われます。その深遠な内容も稲作の一種の文化現象なのです。

上に述べたように中国民族舞踊の中に稲作文化の種々の表現を探した後に私たちは次のように言うことができます。“民族舞踊は稲作文化のひと枝に咲いた珍しい花である。民族舞踊は稲作文化の重要な担い手である”と。そして私たちはしらずしらずのうちに次のような理念に導かれるでしょう。“舞踊と人類との間には密接な関連があり、舞踊は人類の出現、発展、変化とともに出現し、発展し、変化していった。人類が有るから舞踊があり、言語がなくても舞踊があり、文字がなくても舞踊がある。舞踊は人類の衣、食、住、行為を反映し、また生、老、病、死を反映している。さらに舞踊は人類の観念（思想）とあくことなき追求を反映している”と。総じて言えば、人類が物質文化と精神文化を創造する歴史の過程において舞踊はあってもなくてもよいようなものだったではありません。祖先ははるか昔には物質文化だけではなく精神文化をも重視していました。民族舞踊と稲作文化の中から探し出されたこの一つの事実は今日の私たちにとって大きな手本となることでしょう。

訳注1 本主

雲南省大理白族自治州に住む白族の祭る神。白語で「朶博」[朶谷朶泰]（大老人、祖父母）という。

本主は最初は氏族神、祖先神であったが、しだいに村の守護神の性格を帯びるようになった。かつて雲南省にあった南詔国や大理国の国王、中国の歴史上の人物、仏教の仏や道教の神等、さまざまな神、人が本主として各地の白族の村落で祭られている。

訳注2 有巢氏

木を組んで巢を作ったとされる伝説上の人物。

「古えは禽獸多くして人民少なし。ここにおいて、民みな巢居して以てこれを避く。昼は椽を拾い、暮るれば木上に栖む。故にこれを命じて（名付けて）有巢氏の民という。」（莊子「盜跖」篇）



太鼓舞（ジノー族）



葬列の踊り（ジノー族）

稲作文化の中のひと枝の珍しい花

悠久の歴史と広大な土地、そして多くの民族をもつ中国はかなり早い時期に農耕の時代に入っていた。初歩的な農業から技術的な農業に達するまでは何千年もの歴史を経なければならなかった。先史時代に黄河流域と長江流域に住む人々はすでに穀物栽培の方法を会得しており、数千年もの農耕生活は底の深い農耕文明を形成し、そしてそれが中国文化の基本的な特性となっていた。“歴史的な視点からすると人類社会の発展史は先ず生産力の発展史であり、同時に生産方式の発展史であった。雲南に居住する二十を越える民族は歴史上の原因によって、その依拠する自然条件が異なっていたため、今世紀の五十年代初期までそれぞれ異なった社会条件を保持し続け、生産力の異なった発展水準にあり、異なった生産方式を採用していた。それゆえにそれらの一切が、また生活の形態としてそれぞれの民族の生産の習俗の中に^{注①}絶対多数が舞踊形態—すなわち農耕祭祀、民族の祭りに反映され、一種の社会文化現象を形成した。

我々の先祖が野生稻を認識し、それを馴化して稲の人工栽培技術を確立するまでには長い歳月と艱難辛苦の道を必要とした。稲の栽培は人類を養ったのみならず社会に財産として蓄積され、社会の発展を促進してきた。そしてそのことにより独特な稲作文化が形成された。170万年前の雲南の元謀原人^{訳注3}（の化石）と雲南の数十箇所の旧石器時代の遺跡は人類の幼年時代に雲南で原始人たちが活動していたことを示している。古代雲南の土地には陸稻、水稻があり、そして畑地にも水田にも植えることのできる水陸未文化の原始的な稲も存在していた。近年、複数の学者が雲南の一部の地区で多くの野生稻を発見し、これによって次のような結論を導き出した。すなわち雲南は稲作の起源地の一つであり、タイ族、ペー族、ハニ族等は雲南の中でも最も早く稲を栽培した民族である、と。

舞踊は稲作文化を構成する一現象の中でも極めて重要なものとして位置付けられる。雲南の25の少数民族の舞踊の中には三種類の状況が読み取れる。一つは稲作の工程をまねた舞踊、もう一つは稲作と直接関連する祭祀活動の中の舞踊、そして最後は稲作の生活習俗に関する舞踊である。稲作文化の研究には稲作舞踊をなおざりにすることはできず、また稲作舞踊の研究は必然的に稲作文化の研究の深化をもたらす、といえるだろう。



中国の切り紙

注①楊知勇、秦家華、李子賢編《雲南少数民族生産習俗誌》、雲南民族出版社1990年版、7ページ。

訳注3 元謀人

およそ170万年前に中国の西南部にいた旧石器時代早期の猿人。石器や火を使用したとされている。1965年に中国地質科学院が雲南省元謀県で発見した。正式には“元謀直立人”(Homo erectus yuanmouensis)といい、現生人類(Homo sapiens)よりジャワ原人に近い。

一、 稲作文化中の模擬舞踊と農耕の関係

1. チンポー族のブクンゴと刀耕

“ブクンゴ”はチンポー族の老人の死後に踊られる一種の舞踊である。チンポー族の老人が死ぬと、その葬儀の後に使者の魂を送る儀式がとり行なわれる。魂送りの数日前にブクンゴの踊りが始まる。もし死者に多くの子孫がいるか裕福な老人であるなら、その死の当日から村内や隣村から親戚、友人、また青年男女が集まり、死者の家の中でブクンゴを踊る。その時にその家の当主は米酒で人々をもてなす。(裕福な家では食事を出して接待する。)一般的に言って踊る日数が多いほど当主は面目をほどこすことになる。当主の家の中での踊りは輪になって踊られ、二、三種類の音域の異なった銅羅が伴奏につく。銅羅は“ドンディンドン…”という音を出し、このためブクンゴは一名“ドンディン踊り”(跳洞丁)とも呼ばれる。そのリズムは緩慢、沈着、莊重、厳肅なものであり、死者を痛む雰囲気が濃厚である。ただしその踊りの内容は基本的に食糧と綿花の二つの生産過程、すなわち一方は食を、もう一方は衣を表現したものとなっている。人類の生活の二大要素がブクンゴの中に詳しく表現されている。食の表現としては道づくりから始まり、穴掘り、豆まき、土かけ、豆だおし、豆棚づくり、豆の開花、火にあぶり鍋で煮る、また新米をついたり食べたりする四十を越える動作がある。衣の表現は草刈り、土地焼き、綿の種蒔き、綿花の収穫から糸を紡ぐ、スカートを織る、スカートを洗う等二十いくつもの動作がある。これらの動作から“密林の奥深く、雑草が生い茂る連山の中でチンポー族の祖先達は苦心して焼畑農業をつづけていた”というようなチンポー族が農耕の時期の段階に達したときの情景を再現することができる。同時に彼等が長期的な“ハトムギを集め飢えをしのぐ”状態を経て自身の手で穀物を栽培し食糧を得る段階に、あるいは長期間の“樹皮を身にまとう”時期を脱して自分で織ったスカートをかく段階に至った過程を容易にたどることができる。このようにして彼等は非常に珍しく、今日では手に入れない生産知識を記録して代々それを伝承してきた。文字の記録のない年代に、聡明なチンポー族の祖先達は死者を祭る厳肅な時に舞踊を使って青年達にこの貴重な知識を伝授した。葬儀という機会にこの様な内容の舞踊を用いるという選択は一方ではこの様な生産の知識がチンポー族の生活で重要だということであり、他方ではこの様な知識を獲得してきた先輩たちに対するチンポー族の尊敬、賞賛、感謝、そして哀悼の意を表すためのものである。(訳 藤原明人)



チンポー族の女性
(『人民中国』より)



チンポー族の竹の小屋 (『人民中国』より)

自然人 アイヌ こころの歌と踊り

阿寒湖ユーカラ座座長
四宅 豊次郎

第6回 奉納舞踊

刀剣には不思議な霊が宿っていて、大いなる力が存在すると信じられてきた。

剣の舞は儀式の時、最初に奉納されるのだが、他にもいろいろな場面で踊ることがある。

その例として、家屋を新築したときには、家の内に潜んでいる魔物を全て取り除くために、剣の舞を踊る。

この場所では、一人が刀を持って踊り、大きな関^{とき}の声をあげて、家屋の中心にある梁^{はり}に対して刃^{やいば}を打ちつけて刀傷をつけるので、威嚇された魔物はひとたまりもなく退散する。

日蝕は、太陽の神が悪魔に襲われていると考えていたので、地上のアイヌ（人間）達は、剣を振りかざしたり、弓矢を射ったりして、「太陽神よ死ぬるな！ 甦^{よみがえ}れ！」と叫びながら加勢したものである。

疫病が蔓延したときには、風上に向かって剣をかざして、“疫病神よ立ち去れ！”と刀剣の霊力に頼って、威嚇して退散させた。

アイヌ民族の日常は、狩猟、漁撈、採集の生活をして、一部では焼畑農耕もして暮らしていた。そして、これは一般的にあまり知られていないのだが海洋民族でもあった。

イタオマチッという綴り合せ舟に帆を張り、4、5人くらいの乗舟員で、国内は沿岸部を伝って日本海では北陸地方まで、太平洋側では東北地方の各地^{さかのぼ}で盛んに交易をしていた。遠くは千島、樺太（サハリン）、更にはアムール河（黒竜江）を遡^{さかのぼ}ってシベリヤ奥地の山丹人とも交易していたのである。

マルコポーロで知られているシルクロード（絹の道）を西のシルクロードと称すれば、こちらアイヌの交易は東のシルクロードと言える。海洋航海の民としてのアイヌについては、後でまた書く機会もあるので、その時にゆずることにしたいと考えています。

アイヌで特筆しなければならないのは、何とんでもなく狩猟生活をしていたことです。

北国ならではの創意工夫をこらして、その中から智慧をしぼって各種の猟を行っていた。

山野での狩猟はエゾ鹿猟が主流であり、その他にも鳥類、小動物の種類も豊富に棲息していたので、四季を通じていづれかの狩りを行なうことができた。

イオマンテ（霊送りの儀式）で有名なのは熊であるが、これはそんなに数多く獲れるものではないので、食糧としての肉のうちでは主食を占めるほどのものではなかった。

海猟では、鯨、イルカ、トド、トッカリ（アザラシのアイヌ名）、各種の海鳥など、こちらも数多く生息していたことであるし、また季節によって回遊してくるので、狩猟には事欠かなかった。

鹿狩りの場合は追込み猟といって、コタン（集落）の者達が大勢で協力して、鹿の群れを取り囲んで次第にその輪を縮めて、海、湖沼、河川の方向へ追い込んで獲ったり、または断

崖から突き落として獲得した。

他には、アマッポ^{けものみち}といって獣道^{わな}に仕掛弓矢を置いて鹿や熊など射止めたり、罠をセツトしておいて小動物や鳥類を獲る方法もあった。

しかし、狩猟の手段として、アイヌは道具に弓矢を使つての猟が主であった。

弓はマタギ（狩人）にとって命の次に大切なものであったから、必然的に「弓の舞」も生まれたことであろう。

奉納舞踊（2）弓の舞（クー リムセ）

イヤ コウコウ ネイタ ロックン チカブ

iya koukou neita rokkun cikap

（かけ声）（どこに）（坐るのか）（鳥）

イヤ コウコウ カリ コロ カヤ

iya koukou kari kor kaya

（まわり）（しつ）（あるのか）（くり返して歌う）

《しばらくして、狩人（踊り手）が弓に矢をつなぐと》

イヤ コウコウ ネイタ ロックン チカブ

iya koukou neita rokkun cikap

イヤ コウコウ カーニ クニ キーヤン

iya koukou kani kuni kiyan

（弓でもって）（～のように）（しなさい）（くり返して歌う）

近年は祭りの時、この弓の舞を踊る際には、その場に集まった人々の無事息災を祈り、幸福を願つての清めの花矢（エペレ アイ）を空中に向けて放っている。

その矢を拾った人は家に持ち帰り、棚や壁などに飾って魔除けとして大切にす。

（山本エカシ（長老）談）

伝説では、狩人が奥山深くわけ入り、ふと空を見上げると天高く一羽の鳥が飛んでいた。

狩人はそのような姿の鳥をはじめて見たのだが、あまりの美しさに我を忘れて、弓矢を引くこともしないで、ただ感動して見いったという。やがて狩人は自分のコタンへ帰り、村人にその話をして、この弓の舞が生れたという。どこのコタンなのかは明らかでない。

弓の舞は通常であれば一人で踊る。弓矢を両手で胸の前に持ち、歌がうたわれるとオンカミ（拝礼）で踊りをはじめる。

次に、弓と矢の中心を右手に持ち8の字を横にしたような横^{はち}∞の形で弓を大きく斜め左右に振る。大相撲で横綱の最後の取組が終った後で、弓取り式をしているが、大体はあの場面に似ていると言っている。

弓取り式では表面を向いて下方に低く弓を振っているが、弓の舞は最初に左向きに、二番目に右、最後に表面に対して丁寧におこなう。右手で弓を振っているとき、左手は腰にあてている。姿勢は腰を少し落して、胸を張り視線を前方にしっかりと定めて、上体を左右横にゆさぶるように、弓を大きく振るのである。



弓の舞 四宅豊次郎

（訳）“どこに とまる鳥だろう
（空中を）飛び廻っている あの鳥は”

（訳）“どこに とまる鳥だろう
（空中の鳥を）弓矢でもって 射ちなさい”

弓の先端（上側）にイナウ（木幣）を結び付けてあり、そのイナウが横^{はち}∞の字形にひときは大きく、まるで生きもののように動いてとても美しく見える。

その後には矢を口にくわえて、両手で弓の下側に端を持って、イナウで周囲の魔を払うようにしながら、会場を左の方から一周する。

次には弓に矢をつないで左の天空をめがけて射つ仕種をし、そして右の天空、正面中央の天空へとつづく。

最後には、やはり左、右、正面への拝礼で終る。私はこの弓の舞を地元の「まりも祭り」や各地で催されてきたアイヌ行事の中で、もう30数年間にわたり踊ってきた。

踊っている間に、天にも届けとばかり精一杯声を張り上げてオココクセ（関の声）を叫ぶと自然人アイヌの血が身体中に騒ぐ。

中国雲南省舞蹈家協会訪日代表团交流会日程

（1999年6月23日～7月3日）

6月24日（木）	三重県磯部町「磯部の御神田」（伊雑宮の稲作のお祭り）取材	
6月26日（土）	群馬県新田町文化会館エアリスホール	14：00～16：00
6月27日（日）	学習院創立百周年記念会館	16：00～18：00
6月28日（月）	東京芸術劇場小ホール1	18：30～20：30
6月29日（火）	東京芸術劇場小ホール1	18：30～20：30
3月30日（水）	神奈川県大和市立保健福祉センター	18：30～20：30
7月1日（木）	長野県松本市渚カナディアン・ホール	18：30～20：30

EXPO'99 黛民族舞踊団訪中日程

黛民族舞踊団（団長大野晃黛民族舞踊文化財団常務理事）は中国雲南省昆明市で開催される'99昆明世界園芸博覧会のジャパン・デーの公演に参加するため7月16日から7月23日まで昆明市を訪問する予定です。

ジャパンデー記念公演（7月19日）

- 序 「風生」 藤舎名生（笛）、中川秀亮（太鼓）
「祝い舞」 豊作の願い（宮城県秋保の田植え踊り）黛民族舞踊団
破 「伝承…悠久の道」 林英哲（小太鼓／組セット）
「穂花（ほばな）」 沖縄の豊年唄 川田功子の会
「はねこ踊り」 豊年の喜び（宮城県桃生郡桃生町）黛民族舞踊団
破 「大地の響き」 林英哲（大太鼓）
急 「海流」 藤舎名生（笛）、林英哲（大太鼓）
「黒島口説」（沖縄の豊年唄）川田功子の会、黛民族舞踊団

編集後記

舞踊文化E.T.C.は年二回発行予定 ※皆様からの投稿をおまちします
平成11年6月9日 財団法人 黛民族舞踊文化財団
港区赤坂3-10-3 電話 03-3583-3633・3606
FAX 03-3583-3639